

長滝町

二ホンカモシカ

- ◆ 学名 *Capricornis crispus*
- ◆ 分類 ウシ目 ウシ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約70センチ 体重約40キログラム

雌雄ともに角を持っているので、外見から性別を判断することは困難です。カモシカはシカの仲間ではなくてウシの仲間なので、二ホンジカのように角が生えかわることもありません。そのため角に残されたすじから年齢や出産の様子を調べることもできます。

繁殖期以外はメスもオスも単独で生活していて、草やササ、木の葉や小枝などを食べて生活しています。また目の下から出る特別な臭いのする液を木にこすり付けて、自分のなわばりを知らせています。

かつては毛皮をとったり食用にするための狩猟が行なわれていましたが、1955年に特別天然記念物に指定され、捕獲が禁止されたことから個体数は増えています。これまでは山間部がおもな生息場所でしたが、丘陵部や平野部でもたびたび姿が見られるようになりました。その結果、用水路への転落や交通事故などでケガをして保護されるケースも多発していて、いしかわ動物園にも治療のために運び込まれることがあります。たとえ一時的な保護であっても文化財課への届け出が必要になるので、取扱いには注意が必要です。

— 食 痕 —

ニホンカモシカの上あごには門歯(前歯)がないので、物を食べる時には下あごの門歯と上あごの歯ぐきを噛み合わせることになります。そのためササの葉を食べた時などは、葉の繊維が残ったり、葉の断面がギザギザになることがあります。



ニホンカモシカの頭骨

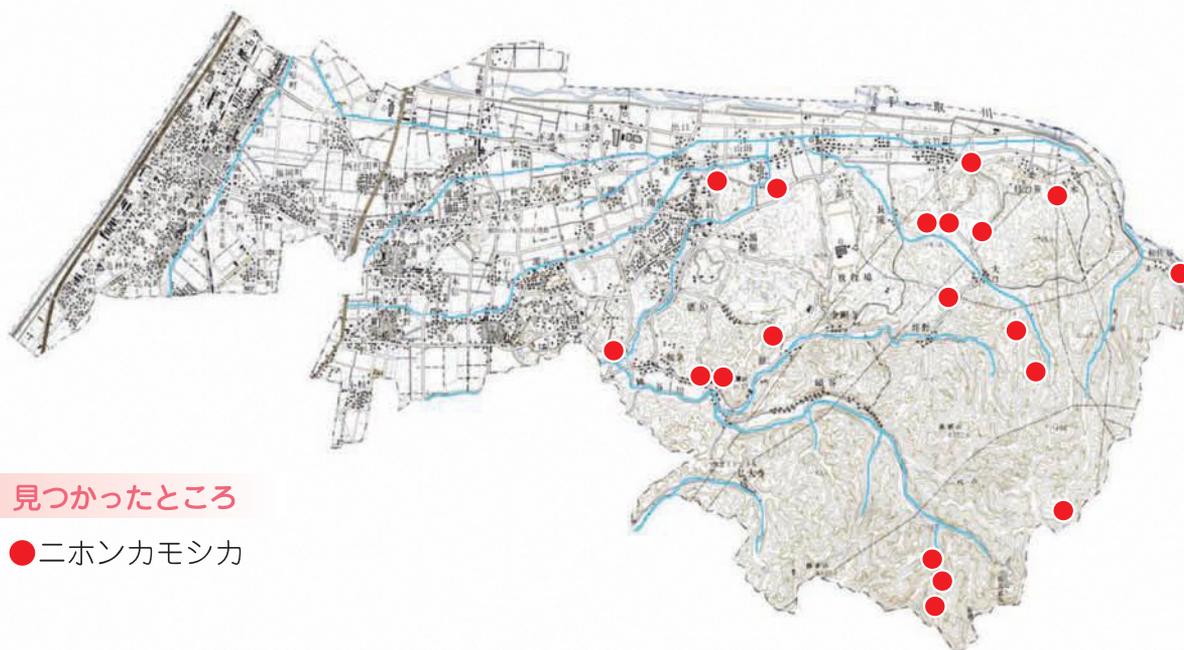


ササの葉に残された食痕



ニホンジカはフンをまき散らすのに対して、一か所にまとめてためフンをするのがニホンカモシカの特徴です。

楕円形で長さ6センチほどの2つの蹄の足あとが特徴です。通常は前足の足あとの上に後足あとが重なります。



見つかったところ

●ニホンカモシカ



ニホンリス

- ◆ 学名 *Sciurus lis*
- ◆ 分類 ネズミ目 リス科
- ◆ 大きさ 頭胴長約20センチ 体重約300グラム

低山地のマツ林などに多く生息しています。おもに木の上で生活しているので、木の洞の中や木の枝に小枝を球状に集めて巣をつくります。活動するのは日中ですが、おもに朝と夕方の動きが活発で、夜は巣の中で眠っています。寝るためだけの巣は複数作られるようです。

おもに草木の花や葉、ドングリ、キノコ、昆虫などを食べています。冬にはマツボックリの種子を食べ、芯の部分を捨てるので、その残りがすがまるでエビフライのように見えることが特徴です。

夏と冬では毛の色が異なっていて、夏では全体に茶褐色をしていますが、冬になると灰褐色に変わり、耳の先端の毛が長く伸びてきます。

かつては食用にしたり、毛皮にも利用されていましたが、現在では狩猟獣からは外されています。各地で松枯れが進行していることから、リスの生息環境にも影響しているようで、個体数が減少しています。また、一部の地域では絶滅した場所もあります。

— リスが森をつくる? —

ニホンリスは冬眠をしないので、食べるものが少なくなる冬期に備えてオニグルミやドングリ、マツボックリなどをいろいろな場所に貯えることが知られています。食べ物を貯える場所は巣の中ではなくて、地面や木の上の枝などに置かれます。そのためアカネズミなどに貯えた食べ物を横取りされることもあります。

巣の周りに貯えられるクルミやドングリは、全てが食べつくされるわけではなく、一部はそのまま発芽して成長することから、動物たちの生活が森をつくるひとつの要因にもなっています。



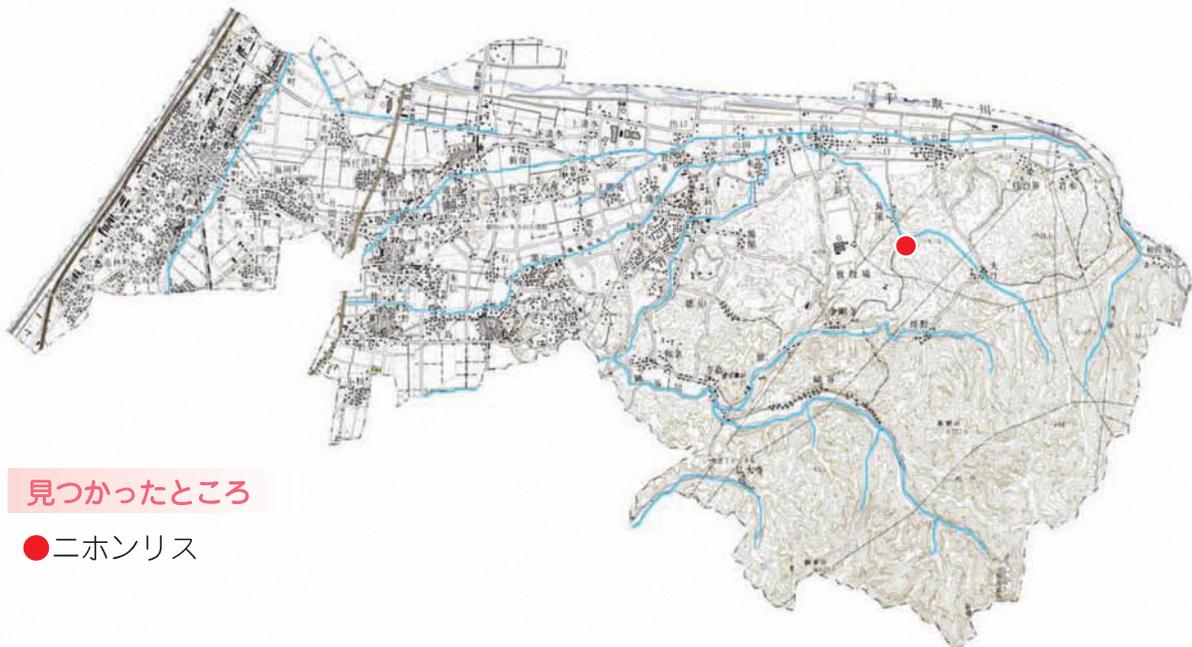
貯蔵されている食べ物



種子が食べられて、エビフライのような形になって残されたマツボックリ。



リスの足あととは大変小さいので見つめることは難しいですが、降雪後には比較的簡単に見つけることができます。



見つかったところ

●ニホンリス



ムササビ

- ◆ 学名 *Petaurista leucogenys*
- ◆ 分類 ネズミ目 リス科
- ◆ 大きさ 頭胴長30～50センチ 体重700～1000グラム

今回の調査では生体やフィールドサインを発見することはできませんでした。灯台笹町の民家には、毎年のように現れるとのことで、繁殖期にはムササビ特有の「キィキィ」という鳴き声とその付近で確認されています。特に大木が多く残されている神社の境内などでは、これまでもムササビの目撃情報が多いようです。

通常は大木に自然にできた穴などを巣として利用していますが、人家や神社の屋根裏などにすみつくこともあります。日中はこのような巣の中で休んでいますが、日没後30分ほどすると巣を出て活動を始めます。巣から出たムササビはまず高い場所へ登り、周辺の高い木へと滑空して移動します。このように地上へ降りることなく木から木へ滑空を繰り返すことで、目的の場所へと移動して行きます。ところが樹木が少なくなってしまった環境で生息するものは、地上を移動する場合もあるようです。

完全な植物食なので、広葉樹や針葉樹などの芽や葉、果実、種子などを食べます。秋にはシイなどの実をよく食べますが、地上に落ちたものを食べることはありません。

— ムササビを調べる —



別名「のぶすま」などとも呼ばれていて、野原で滑空している姿がふすまのように見えることからこのように名付けられたようです。長い前足と後足との間には飛膜（ひまく）と呼ばれる膜があり、これを広げることでまるでグライダーのように滑空し、樹から樹へと飛び移ります。

前足の指は4本ですが、もう一本細長い突起があり、これを使って飛膜を広げています。高い木があれば、100m以上も滑空することができます。また長い尾は滑空するときの、方向を変えるための舵の役割をもっています。



見つかったところ

●ムササビ



アカネズミ

- ◆ 学名 *Apodemus speciosus*
- ◆ 分類 ネズミ目 ネズミ科
- ◆ 大きさ 頭胴長8～14センチ 体重20～60グラム

背中の毛が赤みがかった茶色をしているのが特徴で、尾の長さなどで他のネズミと区別することができます。市内には、平地から山間部にかけて広範囲に生息していることがわかりました。地中にトンネルを掘って、そこを巣として利用しています。繁殖期は春と秋の2回あるようで、1回に4～5頭を出産します。巣材として木の葉などが巣の中に運び込まれます。野外へ出るのはほとんど日没後なので夜行性と思われがちですが、実は巣の中では日中も活動しています。

草の葉や茎、根、木の実、カエル、小さな昆虫などを食べています。また、クルミを食べる時は、堅い殻に小さな穴をあけて、中の実を舌を使って上手に食べるので、その食痕からアカネズミの生息を知ることもできます。また貯食といって、クルミやドングリを石の下などに貯えておいて、食べ物の少ない時期に利用することも知られています。



ドブネズミ

- ◆ 学名 *Rattus norvegicus*
- ◆ 分類 ネズミ目 ネズミ科
- ◆ 大きさ 頭胴長 11～28センチ
体重 40～500グラム

おもに人家の周辺に生息していますが、市街地では地下道や下水道、ゴミ捨て場などの湿度の高い場所で見られます。



クマネズミ

- ◆ 学名 *Rattus rattus*
- ◆ 分類 ネズミ目 ネズミ科
- ◆ 大きさ 頭胴長 15～20センチ
体重 150～200グラム

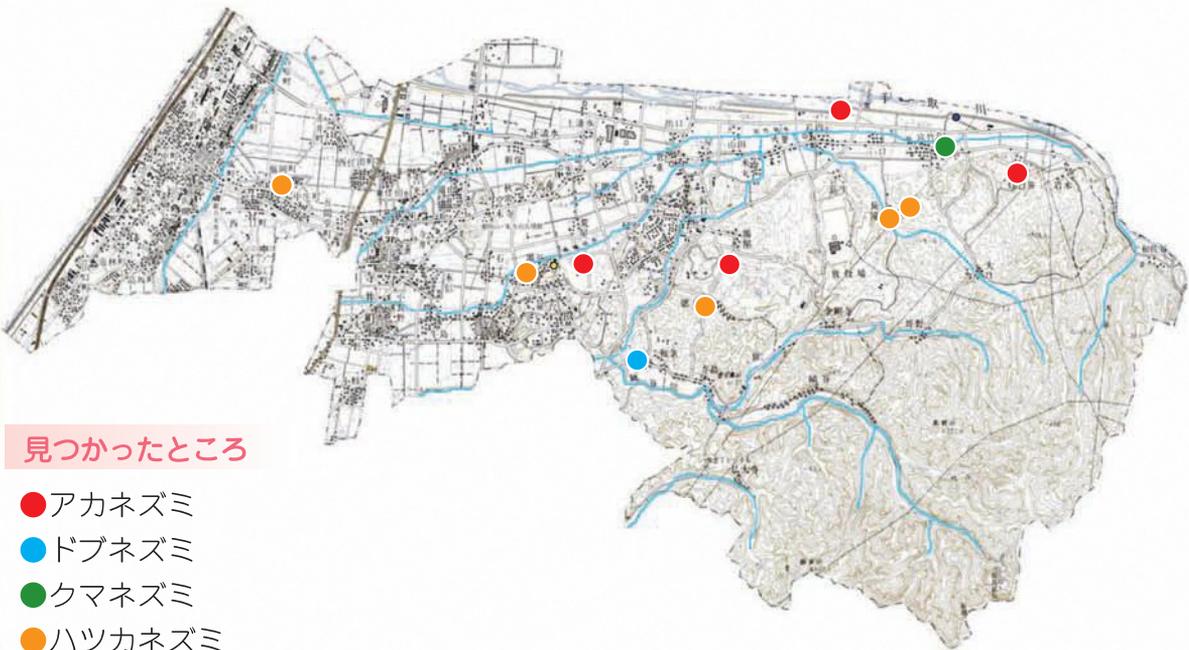
東南アジアが原産の帰化動物と考えられています。ドブネズミと同じように、住宅地に住んでいて、人家の天井裏などにすみつくことが多いネズミです。



ハツカネズミ

- ◆ 学名 *Mus musculus*
- ◆ 分類 ネズミ目 ネズミ科
- ◆ 大きさ 頭胴長 6～9センチ
体重 10～20グラム

妊娠期間が約20日程であることからハツカネズミと名付けられました。実験動物として利用されている白いマウスは、このハツカネズミを改良したものです。



見つかったところ

- アカネズミ
- ドブネズミ
- クマネズミ
- ハツカネズミ



ノウサギ

- ◆ 学名 *Lepus brachyurus*
- ◆ 分類 ウサギ目 ウサギ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約40センチ 体重約2キログラム

おもにイネ科や草本類のやわらかな葉を好んで食べていますが、木の葉や若い枝なども食べるようです。警戒心が強く日中はほとんど活動しないため、センサーカメラや足あと調査で生息を確認することができました。その結果、市街地の公園などからも足あとが見つかっていて、タヌキと同様に能美市内には広範囲に生息していることがわかりました。しかし「石川県の哺乳類」(1999)によると、造林の減少によって、県内のノウサギの生息数は昔と比べると減少しているとのことでした。

一般的にトウホクノウサギは白化することで知られています。石川県に生息するノウサギは冬季になると白化することから、トウホクノウサギといわれていますが、生息場所によって白化する程度は異なっており、平野部のものは完全には白くならないものもあります。

私たちがペットとして飼育しているウサギはアナウサギといって、ヨーロッパ原産のものを家畜化したものです。名前のおり地中に巣穴を掘ってくらしていますが、ノウサギは穴を掘るといった習性はなく、自然にできた地上のくぼみなどを利用して巣をつくります。

— 脱兎のごとく —

ウサギは弱い動物なので、外敵から身を守るために逃げ足が速いことから生まれた表現方法で、時速80kmで走ることができるそうです。また、集団でも逃げるときは、それぞれがバラバラの方向に逃げるので「二兎を追う者は一兎も得ず」ということわざが生まれました。

ウサギを1羽2羽と数える由来には、鳥のように跳ぶことからという説もありますが、江戸時代に、けもの肉を食べることが禁じられていたとき、ウサギをウ(鶉)とサギ(鷺)とごまかして食べたので、鳥のように数えるようになったといわれています。

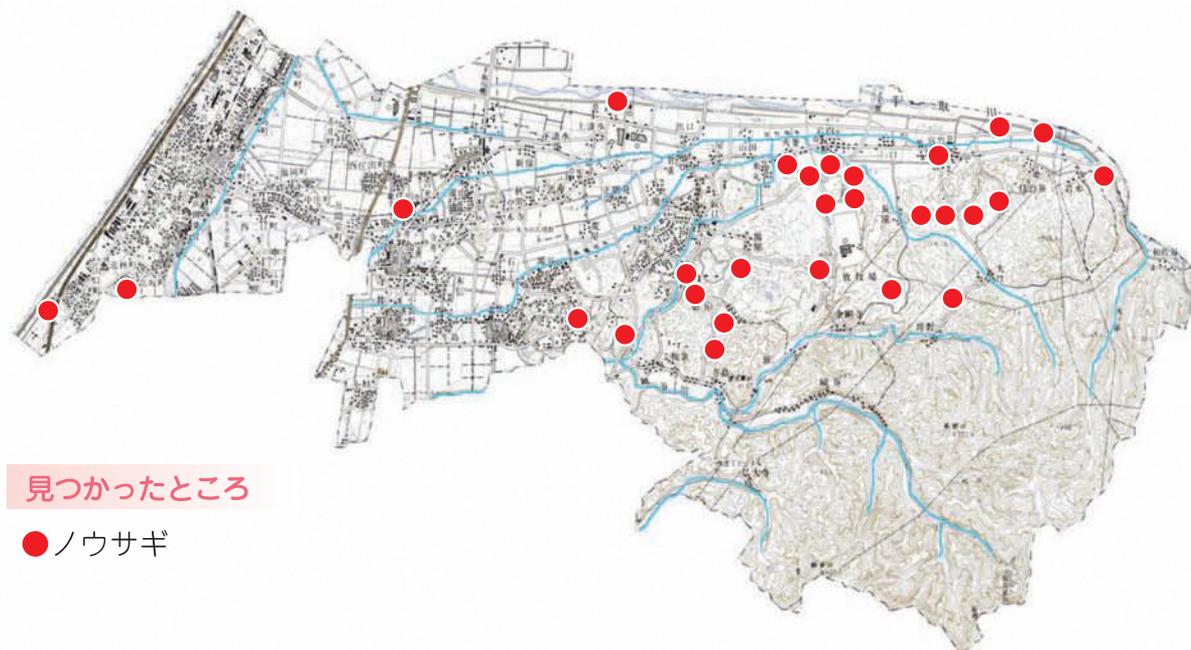
また耳が長く、両耳を同時に別々に動かすことができるのも、外敵を早く見つけるため、走るときも耳を立てているのは、体の熱を放散するためのラジエターのような役目をしているのです。



フンは直径1センチほどの球状で歩行中にもフンをするので、広い範囲に点在して見つかります。



ウサギの足あととはほにゆう類の仲間では最も特徴的です。前足に比べて後足が大きく、後足を平行に出します。



見つかったところ

●ノウサギ